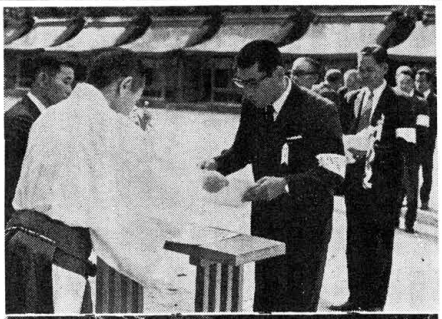
宗像
毎月一日発行
発行所　宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代②1311
定価一年送料共1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市吉塚一丁目三番三号（〒八一三）電話福岡（〇九二）六五一九四六番
本社　京都市下京区油小路六条北入九五番（〒六〇〇）電話京都（〇七五）三二一一三四一（代）～四番

精神復興を希って
遷宮記念大祭盛大に斎行



昭和の大造営とともに千歳一遇の一大祭事として感激深い宗像大社の遷宮祭をトして斎行する遷宮記念大祭は、十一月一日から十五日までを大祭期間とし、十一日に大祭宵宮祭が、十二日に記念大祭がそれぞれ厳粛裡に斎行された。

また、この期間中には既報の通り、一日の月次祭、三日の文化の思いをこめた敬虔な祈りが神前に捧げられた。

一方、境内や神社建物内では神饌行事が種々執り行われ、社頭を始め、その良い子達に至る多数が大いに賑わうと共に参拝者を華やかひっきりなしに参拝し、それぞれいだ気分につつんでいた。

神饌行事の中で最初に開幕した西日本菊花大会は、十一月一日から二十日まで、既報の通り開催され、一日に審査、十一日に表彰式が行われた。

同大会は、福岡県と西日本新聞社の後援と多くの方々の協賛によって支えられているが、これらの人々の温い支援と会員各位のたゆまぬ努力が見事に開花した感を強くした。

神域一帯に馥郁たる芳香を放つ各種の菊花は、いづれも甲乙つけ難い見事なものばかりで、花作りの技術レベルの向上と平均化が観られた。

次いで十一月三日、拝殿において明治奏行後、本殿脇広場において遷宮記念奉納剣道大会が開催された。

出場選手は豆剣士を交えて総勢三百余名、試合方法は勝抜き戦で、小学校低学年の部、高学年の部、中学の部、高校の部、大学一般の部に分れて競われ、秘術を尽しての熱戦が続き、午後三時過ぎ終了した。

一方、祈願殿ロビー及び中二階では、郡内盆栽愛好者による盆栽展が十日より十五日まで行われ、芽吹や盆栽、鉢植等各種の鉢物が百数十鉢出陳され、参拝者の眼を楽しませた。

更に十二日には、当社清明殿において第二回宗像大社献詠短歌大会が盛大に開催された。

当社遷宮を記念して始められたこの大会は今年で第二回目、昨年にも増して盛んで、早朝から参加した敬道愛好者百六十名、県内各会の主宰者等十名の先生方を選者に擁する合同歌会とあって会場は熱気がこもり、選歌の解説、選評に質問が飛び等有意義な短歌大会となった。

また、宝物館ではこの大祭期間中、郡内寺宝展を開催し好評を博した。

郡内には埋れた文化財が数多くあるとされているが、今日まで公開の機が少く人々の認識も非常に薄い所から、宗像をより深く識っていただく事と、文化財保護、更に文化財活用の面からも意義あることとして、昨年の郡内社宝展に続いて開催されたものである。

宗像大社文化財事務局では、多大な反響に意を強くし、今後は更に生活展などにも手掛けてゆく次第であります。

このように同大祭の各神賑行事は単なる神賑いの意にとどまるものではなく、復興造営御後の精神的復興を期して斎行するという大祭趣旨に沿って進められているが、年々に飛躍的な拡充がみられる事は誠に喜ばしいことである。

針を固めている。

師走のまつり

十五日　古式祭　午前六時（御座）
　　鎮火祭　午前九時
三十一日　大祓式　午后五時
　　除夜祭　午后五時半

人形祓いの返送について

今月初旬より崇敬者の皆様方に郵送申し上げている人形祓いにつきましては、人形をなるべく月末までに御返送下さいますよう御願い申し上げます。

宗像郡では始めて
桜京装飾古墳指定答申さる
――土地所有者、大森トミ氏の快諾を得て――

この古墳は当社から神湊に通ずる県道の西側、牟田尻の山中に点在する約八十基の古墳群の中央にあたる丘陵頂上に位置する六世紀に築造された前方後円墳である。石室は横穴式複室石室で、玄室に石屋形が築かれ、この石屋形の奥壁を中心に沈線縁取りをし、内に赤・緑色の顔料を塗った三角連続文の装飾がある。

この装飾古墳は九州における装飾古墳として、現在確認されているもの最北端に位置し、古代における宗像の、筑後・肥後地方の文化との関連を知る上にも重要な古墳とされている。

玄海町教育委員会では早期からこの古墳を大切に保存すべく、県に働きかけていたが、この度所有者大森トミ氏の快い承諾を得て、十月二十四日、文化財専門委員から県教委に答申がなされ、遅くとも一月中旬には県指定史跡となる見通しがついた。

論説
大自然と人間性
――ある人生末期の神霊観――

公害先進国と自認するわが国、生活環境の複雑に加えて、人間関係の様相も益々苦悩を増してきた。その解決の道を学者や宗教家に求めても、容易に納得できない。神仏を拝んでも人生の苦悩などという大命題に、簡単に答が返ってきそうにはない。

ここに先頃八十六歳の長寿に達し、悠々自適の人生の幕を閉じた老翁を想い、その平素の所見と末期の神霊観について考えてみる。翁の未亡人は、信仰心が厚く幸福な生涯であった翁の末期の人生観を語る書面を、気のつくままに長々と認めて送っている。

人間は大自然を対象的に客観視するが、人間自体も大自然の一部である。無限の大自然の中の地球に、他の動植物いな生物一切の棲息に含まれる。それは如何に進歩しても、大自然のはたらきの中に生きる微生物人間に過ぎない。環境破壊とか自然保護とかと言われるが、人間の智慧と活動が少しばかり周囲に手を加えて、苦情や批判を浴びているだけで、大自然の作用に何等の影響も起らない。

桜は開花までの蕾が、既に九月前に萎因となるものが自然に作られ、小鳥の胆は一定の時日を経ると自然に雛になりやがて上空を飛ぶ。誰が教えた方法によるのでもなく、植物や動物が考えやっていることでもない。大自然のこのはたらきは、如何なる科学者も究明し得ない限界の奥にある。所詮人間の生存も、地球上に描き出す絵模様も、大自然のはたらきの中にあり、その作用の一部と観察する外はない。

このような翁の自然観・人生観に興味を覚えた。翁は眼光紙背に通ずる学者でもなかったし、学問好きでもなかったようである。育った家庭の影響からか、信仰心に厚く真面目で一貫したが、おおらかなのんびり型の平凡人。いつも春風駘蕩、これを養うこと春の如しとの文句を象徴しているかのような存在であった。

「八年学生」というあだ名が、若い頃の彼につけられていたと聞く。本人も知っていたであろうが平気なもの。県立の中学は旧制五年、それを八年かかって卒業した。晩成型の老年学生には、自分より若い先生もあったそうである。貧落第、言は本人の羞恥と苦悩は大変で、そのために不良化したり自殺したりの結果も少くなかった。それをご寛容にも三回足ふみをして、八年学生とはなったのである。

他にもう一人の無頓着型の老翁がある。大学を出て就職数ケ月でやめた。結婚後旅館を経営したが商売気も銭勘定も知らぬ顔では長続きはしないのが当然。学生よ、もう帰るか、又来ないで、何日かの宿泊料も請求しないで客を見送る。八年学生と兵通の一面が想われて、微生物人間ではなく自然物の人間の観がある。

さて、人生末期にその神霊観をどのように語ったか。神の恩恵・仏の慈悲をどう悟っていたのか。

八百万の天神地祇、無量寿の仏院菩薩、みな翁極は大自然のはたらきに、崇拝帰依を献げる大自然の一部のはたらく人間の心に映る一面である。神仏に種々の名はあっても、大自然の一面のはたらきを観て尊び讃えるのである。豊作・健康・安産・繁栄と人間の慾望はあるが、不完全ながら自然の一部である弱い人間はそれを希求する。そのため色々の智慧のはたらきが起る。そして特定の神徳や霊験のある神仏を拝む。人間の心が持つ神仏はそこにある。

翁の神霊観は、仏道の先達と同様に、折ふれての断片で、意見としてない。神霊観・信仰の本旨は、翁自身の人生観に立つ悟りであろうし、理屈で知ろうとする評論家じみた思惟は、問題にはならない。然し、神仏みな窮極大自然のはたらき、人間また大自然の一部と真剣に結論つけていたのであろう。

宗教学で言う自然崇拝は、地上外の日月星辰を別とすれば、小自然と見られる山岳・樹石・風水等を対象として発生した。神祇の敬称はそこに宿る神秘性に名づけたことになる。翁は祖先崇拝も自然崇拝に帰し、それが孝道を教えてくれた。父祖を敬う孝徳が、すべての情操・徳行の基と説く。

折ふれての翁の二言は、特に印象的ではあったが、常識的ではなかった。常識とほいい加減なものが多い。大自然の一部人間に終始の人生があり、そのあり方は、何人も常識的であって生きられるのであろう。

阿蒙少言

消費は美徳などと、物を浪費するのを高度の文化生活と思う時代は、どうやら修正期に来たようである。戦中戦後の物資欠乏に苦労して生きてきた人達は、今も包装紙一枚でも空箱一個でも、取って他日何かに使う習慣が残っている。不用の物でも大切にし容易に捨てない態度、浪費美徳の中に育った若い層は、ケチとして嫌う。ならばケチが美徳であったわけ○敗戦は敵国の食糧衣類のおめぐみを受けて、飢えや寒さを凌いだ。主食の配給が四十日以上も絶えたこともあった。当然正直に僅かの配給米を待っていたら、餓死したであろう。国民総乞食時代は厳しい統制、喧しい闇取引、命をつなぐ絶対絶命の場合だ。法を犯すも徳も、ある程度黙認されていた。○配給延引は遂に司法官と警察官を餓死させた。当時革新政党の代表は議会の演説で、吾々は闇の米を食っているから活動できるのだと、取締の役人はじめ誰も彼も同様と言わぬばかりにうそぶいた。その通りだから仕方がないケチどころの話ではなかったが、若い層は聞いても実感が湧かぬらせてもらう荷物列車、統制品の風呂敷包みを検査する警察官、文字も書けない低級米兵の横暴、結婚式はモンペ姿、と列べると乞食充満の日本列島の惨状。人心も爆撃につぶれた街の瓦礫にひとしかった○必要が知慧をしぼり、何でも活用させる。戦場では路傍の空罐を拾って、大事に持ち歩いたこともある。水汲み炊事物入れ洗面の用と活用の広い道具であった。今は空罐の仕末に困る生活○昔、たんぽ路をわが家へ帰る老人、小便を我慢してやっと自分の田畑へ辿り着き放尿した話。動機が礼儀ではないこと勿論。土を愛する農民の真面目は馬鹿げていない。（白雲）

第二四回　宗像大社歌会詠草
毎月十五日〆切　詠草到着順

八幡　安川　浄生
武丸　立石うせ乃
山の端にかかりし夕日赤々と用水池の水を染めたり
田熊　岡部　緑陽
短歌会終りて見むと任えしが寒に罪あり菊花見のがす
津屋崎　菱花　女
病室に季節の花を絶へず挿す心ばりの心床しき
深田　中野　節子
浜木綿の花にすがれる足長蜂副靨に濡れし翅重たげに
勝浦　永島　文子
畑作をやめて久しも庭隅にお雑煮用の鰹菜苦植ふ
香椎　桜井　ツ子
返り咲く八重の桜の寂なり春よりもいろふかき一輪
徳重　石松や寿子
美しく着飾りし子等入賞の菊を背にして写真うつれり
名残　竹原　圓
うれしさは顔にかくせず受賞せし菊に寛ひの水を注ぐ人
田久　小方　実
北方領土の戦れる朝刊の大き記事思はず吾が掌握りしめる
田島　吉武　武雄
愛くつ叶わぬままに老い行きて鳴呼青春は夢の間に過ぎ
原町　八波　五月
九州場所の幟に沸立つ街に居て我一人大を看病てありき
律屋崎　麦野　時雄
裏庭に洗柿うれて朝夕にこたつながらに眺め暮もも
武丸　原田　リノ
留守の間に虫に食はれし山茶花の葉のなき枝に三日月やどる
吉留　早川　須磨
帰り来ではじらいもなく肌さらす我が家に風の青田より吹く
光岡　河村　久光
刈りゆける平野は白々かわきつつ去年より今年は早く冬くる
石丸　原　一興
丹精の翻を競いおり境内の色増すあたり長閑陽さしいる
東京　花田文五郎
年毎に盛大となる放生会神湊に神の入船
福岡　江崎　琴子
朝さなな廊下を磨くすがひたに今日の幸せねがいこめつゝ
宮田　片山　朔子
求め人と定めていたり本二つ手にして秋の陽浴びつ帰へる
宗像　中村　幸
洗物干しある肩になにかなる音していちぢくの柿葉とまる
冨地原　山田　高野
ガラス戸に車のライト照り映えぬ吾子帰りをたしかめて寝る
津屋崎　内田　久美
小窓より山と海とを見下ろして歯をみがく吾が幸せ知るも
宮田　片山　一
日並べて菊の陽芽をつむ朝摘も無駄花に露は光れり
戸畑　田中ハツセ
癒うし診断をして包みなく母に告ぐるをせむる妹
津屋崎　占部　由久
肌寒を覚ゆる部屋に迷ひ消書き餓の灯を点ひる
大井　吉田ますみ
秋来れば秋の鳥訪ふ峡里の朝のひとき心やすけし
大井　吉田ますみ
秋来れば秋の鳥訪ふ峡里の朝のひとき心やすけし

〈遷宮記念大祭諸行事〉

充実した好成績に称讃

先月二十日をもって遷宮記念大祭の諸行事の全てが終了した。

各行事とも同大祭日までに全ての表彰行事を了へ、発表通りの方々が表彰されたが、賞にもれた作品、もしくは競技選手にしても、来年に期待できる充実した成績を残し、人々から惜しみなき称讃と拍手を浴びていた。

宗像大社当局としては、各行事を充実しつつ各行事を拡大推進していく方針である。これら諸行事の成果から展望すれば各行事の今後の見通しは明るいと推測している。

宗像大社菊花会主催　第三回西日本菊花大会成績

審査はこの大会の開幕初日である去る十一月一日に行われ、二日までに金賞の表彰者を決定した。

審査には県園芸試験場長、小原赳氏、同研究室長松川時晴氏、同研究員柏木征夫氏、県農業花き専門技術員鳶田中二氏、九州菊花会連盟理事長斎藤作衛氏の五氏があたり、厳正なる審査がなされた。

作品がいづれも優秀でつぶ揃いであったため、審査が難航し、上下つけ難かったとのこと。

第三回西日本菊花大会受賞者（順不同敬称略）

○最優秀模範作品賞
大輪　嘉穂郡　川崎　正木

○内閣総理大臣賞
盆栽　小倉区　竹内　豊

○農林大臣賞
大輪　福岡市　柴田久米好

○文部大臣賞
懸崖　若松区　平野　直義

○知事賞
大輪　八幡区　広渡　健寿
盆栽　遠賀郡　高島　茂人
懸崖　若松区　川野　盛
特作　嘉穂郡　川崎　正木

○県議会議長賞
大輪　福岡市　古屋　謙助
仝　粕屋郡　中野　誠
懸崖　若松区　島村　一
盆栽　戸畑区　志和　一友

○宗像大社賞
大輪　福岡市　宗　秋夫
懸崖　若松区　堀ノ内稲男
盆栽　小倉区　杉山喜三郎
特作　飯塚市　伊藤　富夫

○西日本新聞社賞
大輪　粕屋郡　青谷貞五郎
懸崖　門司区　池上　福元
盆栽　八幡区　柏木幹次郎
特作　戸畑区　俣野　辰雄

○宗像大社菊花会賞
大輪　粕屋郡　矢野　定
仝　福岡市　長谷川良次
懸崖　門司区　駒山　直次
盆栽　行橋市　新川　一夫

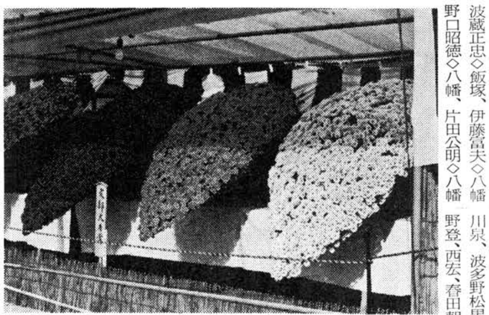
○県花き園芸組合連合会賞
大輪　福岡市　中山　保
仝　粕屋郡　當岡　勇
懸崖　門司区　佐野　功
盆栽　小倉区　石本　正義

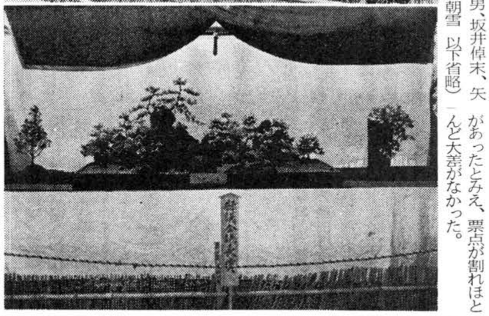
○優秀賞（町村長会長賞）
◇宗像郡、吉崎三吉◇八幡、古波蔵正忠◇飯塚、伊藤富夫◇八幡　野口昭徳◇八幡、片田公明◇八幡　塩川辰雄◇鞍手、丹生兼彦◇八幡　山崎正親◇小倉、溝部元義◇八幡　広渡健寿◇若松、平野直義◇八幡　柏木幹次郎

○優秀賞（玄海町長賞）
◇八幡、山本潔◇戸畑、俣野辰雄◇門司、駒山直次◇八幡、加藤忠雄◇八幡、吉田巌夫◇戸畑、藤田直行◇粕屋、青谷貞五郎◇八幡　前野ますえ

○優良賞
山崎正親、吉崎千代子、波多野松男、安永秀喜、藤崎長雄、杉下松雄、原田到留、南川泉、田中正好、前野ますえ、加藤忠雄、木村宜彦、山本潔

○特選、金賞
田代定、池上福元、佐野功、志和一友、木村宜彦、古波蔵正忠、南川泉、波多野松男、坂井倬末、矢野登、西宏、春田朝雪　以下省略）





第二回宗像大社献詠短歌大会成績

同短歌大会の成績を決める選票集計会は去る十一月二日に行われた。

この選票は作品集とともにあらかじめ各人と選者に送付されていたもので、各々十首を選び、作品番号を記入して返送されてきたものである。選者からきた票が選者選となり、各員からの票が互選となるわけで、この日は同大会運営委員長立石昇氏を始め外十名の委員が厳正なる集計を行い、選者賞三賞、互選賞五賞、入選佳作十賞を決定した。

作品はいずれも甲乙つけ難き面があったとみえ、票点が割れほとんど大差がなかった。

選者票の重なりは選者選第一位の五票、互選票の重なりは互選第一位の四十六票であった。

短歌大会成績並作品

選者選第一位
宗像大社賞　恒成美代子　福岡
湯殿より聞ゆる夫と子の会話わが入りこめぬ親しさのあり

選者選第二位
知事賞　古賀　萌子　小倉
片翅をうつして蜻蛉水張りし漬物桶のふちに動かず

選者選第三位
毎日新聞社賞　中尾　健吾　福岡
土工われを朝より阻む雨ながら甦へる如き花壇を見をり

互選之部
以下第五位まで毎日新聞社賞

最優秀賞　山田　高野　宗像
三十年を土にいどみし節高き指に無用の指輪秘めもつ

第二位　中川みさを　戸畑
縛れあひて草は幽けく実をはじく光も風も秋ならむとす

第三位　吉田　博子　宗像
登校時刻せまりし吾子は飼犬に口笛一つ吹きて走れり

第四位　藤渡由久子　筑紫
果さざること多く夏を逝かしめて春咲く花の種あつく播く

第五位　大和　虎雄　小倉
人の非を責めし心のむなしさのはね返へり来て我をさいなむ

入選之部（佳作）
第一位　中村　重義　八幡
第二位　喜田村千秋　小倉
第三位　比後多美子　小倉
第四位　原田　英子　筑紫
第五位　安部　静子　宗像
第六位　近藤　友見　中間
第七位　松尾　豊　宗像
第八位　青木　冬野　粕屋
第九位　柴田　悦子　福岡
第十位　大隈　幸代　小倉

第四回宗像郡剣道大会成績

剣道大会は三日の午前九時から約三百余名の剣士が参加して挙行された。

試合は主催者である日本剣道連盟宗像支部の役員が二手に分かれ二試合場をもうけて進められた。

参加選手の大半が豆剣士、中でも小学高学年の部が参加者多数のため一部と二部に分けられるなどの変更があって計五部となり、各々の部の個人勝抜戦として技を競いあった。

剣道大会成績

○小学校低学年の部
一位　矢原吉彦（池野）十三人抜
○同　高学年の部一部
一位　藤川和夫（土穴）十四人抜
○同　高学年の部二部
一位　山口勇治（南郷）九人抜
○中学校の部
一位　井原一磨（玄辰館）五人抜
○高校、大学の部
一位　辻　篤典（宗像高）五人抜

漫筆明暗箱 (10)

野球を読む

海外から来た青年が、スポーツ新聞が大変な人気で電車バスの中で熱心に読まれているのを見て、日本の野球は読む野球かと、驚いた話を聞く。なるほど、朝の通勤時の売店では新聞がよく売れ、車内は野球欄を開いている人が多い。ファンは前日前夜の勝敗が、何より気がかりと見える。

読む野球と対照的なのが、見る歌と言えよう。テレビを見ていると、人気歌手の登場ともなれば、まだ歌わぬ前の観衆の奇声狂騒はすさまじい。歌は聞くもの、静かに聞いて楽しむものでなくて、見て騒ぐものと思っている風景。これも外人の驚きの種になろう。

今日とは世相も甚しく違った昭和十四五年、人気歌手はキチンとした服装で直立不動の姿勢に近い態度で歌った。歌そのものを聞いてもらった。奇妙な身なりをしたり、腰や手をやたらに振って聴衆に媚びたりの歌い屋は少なかった。今の舞台は、聴衆ではなくて観客の人気点数を稼ぐための歌だから、芸術としての自覚や自信などない方がよいのかも知れない。これも東南アジヤの留学青年の驚きになりそうだ。

見る歌や読む野球にさしたる害はない。外人がどう思っても気にすることはなかろう。レジャー熱高まっての旅行ブーム、特に海外巡遊にはエコノミック・アニマルの不評を裏付ける行動がありそうだ。金のだぶつく国、暇の多い国民に、良いことがあろうわけもない。その上、海外派遣の商社マンが、道義背反の商法にうつつをぬかしては。

この頃、カナダ人の日本人観が報道されていた。勤勉でやはり東洋諸国のリーダー格だとする見方が多いのは結構だが、狭い国民だと指摘する点数も少くないのは痛い。海外旅行のみやげに貴金属が目に立つとか。他国の風物に学び人情に直接ふれて、見聞を広め観光を楽しむだけにあらず、帰りの駄賃にひともうけを企らむなら、痛い別名を献られても仕方がないとあきらめる外ない。

太平記にある青砥藤綱の故事など、日本人の先祖にはこんな算盤に合わぬ馬鹿をする者もいたのかと、笑う利巧者が少くない現代の世情では、列島改造の大理想も順調には進むまい。川に落した小銭を探すのに、多くの人手と費用をかけた藤綱経済が、商業道徳の教育に企業公害の自戒に生かされる日は程遠い話か。

小人閑居に不善の戒めがあるが、浪人の僑屋には、何の説教もない。生活に豪華の片鱗はなくても、気楽放吟が最良の贅沢である。総理大臣が高価な鯉を集め立派な別荘を持っても、教員組合の尖鋭教師が老母を足蹴にしたり、離婚歴豊かな女優が身の上相談に応じたりしても、質素な茶の間に坐して小鳥をきく浪人には、何の変哲も呼び起さない。

終着駅地獄への旅立ちまでの楽しみと悦楽を予防するために、折々金のかからぬ一人旅に出る。一人では寂しかろうと言う者があれば、こう答えてやる。生れる時も裸で一人、死ぬ時も同じ、戦争暮らしを除く数十年二人三脚の老妻は、気の合った友達と勝手な旅を楽しみ、共に明日を考えない、と。話し相手に山河があり、長い人生行路に綴った心の記録がある。

旅はよき友人であり先生である。中でも雑音のない田舎のひなびた温泉が嬉しい。湯煙りの黙坐に何も考えない空っぽの頭になることが、こよなく楽しい。時々は観光会社の募集する団体に参加するが、これはひとりぼっちのつもりでも同行がある。

隣席が誰であろうと一切かかわりはない。話しかけても応答だけ、仲間入りはご免。貸切バスの帰路、酒気も手伝って車中は、歌を見たり野球を読む連中で賑やかになることがある。窓外の風景を眺めながら、明日を考えぬ独りに楽しさがあるとすれば、恍惚近しかも知れない。

船を見ると、ご用船に乗せられて、さらば祖国よ栄えあれと、出陣の当時が甦える。滝の音を聞くと、文覚上人の遠塵離垢の苦行などは浮ばないで、戦陣の眠れぬ暗夜の川音を想う。どこかにつわものの心が残っている。旅を行く老骨にも、反動と呼ばれる軍国の残影がつきまとう。明日はなくても昨日は心の記録にある。

野球音楽は縁談の趣味によく出る。老人は孫を相手に野球音楽を話すことがある。やはり野球を読む必要も起ろう。

（落花生）

神湊（こうのみなと）(35)

楠　早鳥作
福田長庵画

大内弘世　その五

豊前国柳浦、肥沃な宇佐平野を背后にひかえ周防灘を臨むこの港は、往時小松内大臣平重盛の采邑であった。この浜で平清盛の弟経盛が寿永四年壇の浦の戦に敗れ入水し果てたことは謡曲にもうたわれ、よく人の知るところである。平家滅亡后は宇佐大宮司の所領となり宮方の兵站基地として重要拠点となっていた。

ここに著目し長駆これを襲う明継の策は全く敵の意表をつくものであった。

建徳二年十月二日寅刻、柳浦沖に集結した串崎海賊の船団は舳艫をふんで満潮の河口に近ずいた。

「無益な殺生はするな、人家と倉を焼きつくせ、あと一刻で潮が干き始める、引揚げの合図は法螺貝三吹ぞ」

岸にそって船をつなぎ海賊衆は闇の中を走っていった。明継は船に残り刻の移るのを待った、舷側から灯りを出し水面をみると船の近くに漂っていた塵芥がすっと闇の中に溶けるように流れた。潮が干き始めた。

「貝を吹け」

鋭く言って岸の方に目を向けた。漆黒の闇をいんいんと貝の音が流れて行く、その時、ぽつぽつと赤い火が方々でまたたいた。鯨声が上った。川の流れが速くなった。火が家並みにまわったのか空が赤く焼けにわかに物騒がしくなった串崎船が一隻また一隻とも綱を解き川の上を滑るように流れて行った。

「雑作のない戦さで御座った」

白みかけた空を仰いで草苅満房が明継に語りかけた。

「今暁の勝利は海賊衆の戦さ上手によること、流石、義経公より免租を許されただけのことはある天晴なものよ」

串崎の海賊衆は、源平合戦の折壇の浦に於いて活躍をし、その功によって源義経より日本全国何れの港に船をつけようと入港税は免除された。

「今から先の事だが、もうそろそろ敵も門司関に向けて奇襲をしらせる早馬を出すだろう。とすれば午の刻にはこの有様が知れわたる。このまま帰れば苅田あたりの沖合で敵と遭遇し船戦さとなるは必定。何とかこれをかわして逃れたいがいい考えもない。海賊衆の知恵をかりるか」

合図をすると近くの船が寄って来て舷側を合せた。乗り移って来た海賊に意見を聞くと

「それどころか、あれを見なせえ」

と言って朝焼けの空を指さした。

「今の時季、こんな天気は嵐になる前ぶれよ、苅田沖で必ずやられるな」

そうか嵐か、それなら双方戦さところではない、一目散にその中を突っ走れば逃げきれる。明継の瞳は輝いた。船団は行く先の解らぬまま動きを止めた。明継は大きく手を左に振った。その頃から波立ち初めた海の中を真しぐらに船団は進んだ。

十月九日、今川了俊は長府へ入った。弘世は了俊の宿舎として長門国二の宮、忌宮神社の社務館を充て、麾下の将士は凡て幕営させた。

十月十二日、弘世は社務舘に了俊を訪れ、九州の戦況、赤間関近海の彼我の動きを説明し、また九州入りに際しては義弘に兵四千をつけ扈従させると約した。

「御子息義弘殿の話では門司関に宮方の船団が集結し我等の渡海を阻止せんものと機を窺っているとの由で御座ったが、それは如何なりましたか」

弘世は答えて宗像家の臣井上明継の働きにより敵を退かせた始終を語った。

「張士誠の子息とうわさされるだけのことはありますな、しかしその者、今后どのようなお取扱いをなさる御所存か、明国もこのところ世上ようやくあらたまり、国外に王家に怨をいだく者がおるのを知れば、ちと事が面倒になりはすまいかな」

「その儀については、他家の臣のこと、凡て宗像殿の胸一つにある事ゆえ、吾等が兎角申す必要は御座るまい」

と言って弘世は了俊をうとまし気に見た。

十一月二十九日了俊は赤間関に移陣した。壇の浦を眼下に見下す亀山に陣を張り九州の連山を臨んだ。

老人大学、成人学級盛んに

宗像郡に新しい気運

―宗像大社菊花会などが全面支援―

このところ郡内の老人大学や成人学級の活動が盛んになって注目を浴びている。

この現象は色々の世情の要因が重なってのことではあるが、近頃従来の沈滞ムードから脱却し、教育郡宗像、神郡宗像といわれた頃の宗像に自分たちの気力で帰えしたいといった気運が除々に芽生えてきた。それには老人という名のもとに傍観者に堕してはいけない、もっと精神的にも肉体的にも生き生きとした生活をしなければならないとする活動的面が表面化したとみれる。

これには宗像大社のご復興後、精神復興を希って斎行されている遷宮記念大祭が大きな刺激となっている。中でも同大祭の神賑行事が文化行事を中心にしたもので、加えて総合的精神文化昂揚の啓蒙を目的として推進されていることに起因するものといえよう。

早くも短歌などは老人大学などで宗像大社歌会の講師、仰木実氏を始め各会員が啓蒙に活躍しており、園芸活動などには宗像大社菊花会々長高原鹿吉氏や同理事長、高原茂人氏などが講師となり地元菊作りの推進がなされている。

これは各町村の公民館や教育委員会の要望によるものであるが、宗像大社としても全面的に協力する意向で、今年より始まった盆栽展を始めあらゆる面に活動の場を作り、行事と共に拡大推進する様つとめている。

菊花展に集う老人大学の受講生　花の姿、気品等具体的説明を聴いて感心する老人達

話題の新車をみる（八）

スバル・レックスの巻

石油危機という未曽有の事態の影響によって、自動車産業としても特にその売れ行き面に於て少なからず心配がされている。

これと相俟って、今まで盛んに取り沙汰されていた自動車の排気ガス公害・並びに公害規制の騒ぎは、これに圧倒されたのか、少しくマスコミより姿を隠した感じ。

「石油危機」「公害問題」―いずれにしろ―自動車にとって今日は試練と受難の時代であろう。

扨て、今回は、「大気を汚さない」（きよらか性能）・「石油資源を有効に活かす」（経済性能）―をモットーに新登場した富士重工のニュー・スバルREXを紹介したい。

軽自動車部門に於て、昨年三菱のミニカが2ストロークを廃止したのに続いて今、富士重工も又現行のDEXのエンジンを2サイクルから4サイクルに換載した。その狙いは、4サイクルエンジは2サイクルに比べHCが処理し易いといわれ、五十年排気ガス規制クリアのための方策が最大理由。同時に、好燃費・騒音等の質的向上を計ったと見るべきであろう。

ニュー・エンジンは水冷4サイクル直列2気筒OHCで排気量三五六CC、圧縮比九・五、最大出力三一PS／八〇〇〇RPm、最大トルク三Kgm・／六五〇〇RPmを発生する。特長としては、通常のIOHC機構ながら燃焼室型状を効率のよい多球型にしていること。騒音振動対策として、特にアイドリング時の排気音をカットするアイドリング・サイレンス・バルブの採用、またカムシャフトをコックベルトでドライブしていること、クランク軸に平行してクランクバランサーが設けられ、軸回りの慣性力をうまく中和させていることなどがあげられる。

次に、この新エンジン換載に伴い内外装および機構関係の一部も変更並びに改良された。

①フロントグリルの一新 ②タイヤのグレードアップ ③リアアクスルの等速ジョイント ④2系統のブレーサーキット ⑤シリーズ初登場のフロント・ディスクブレーキ ⑥衝撃吸収ステアリング ⑦助手席シートベルト ⑧スピードメーターに②③④とマークを付し各ギヤの使用上限を速度で示した"タコメーター不要"の設定などである。

なお、低公害対策に関しては、スバル独自の低公害システムをSEECと称し開発しており、特にREXのものはエアサクション方式に触媒コンバーターを組み合わせたもので、SEECーKと呼んでおり、五十年規制値を大幅にクリアしたものである。

"県立少年自然の家"

―当社司祭で起工式―

年毎に自然が失なわれ、少年達が自然の中で勉学に体育に励む環境が少なくなって来ているが、去る十一月二十八日玄海町大字江口の松林の一角に"福岡県立少年自然の家"の起工式が株式会社浅沼組主催のもとに知事代理ら多数が出席盛大に執り行われ、関係者一同、待ちに待った施設だけに喜びもひとしおで捧げる玉串に深い敬虔な祈りがこめられた。

少年自然の家は、玄海町提供の敷地に建築面積四五〇〇㎡を以って建設されるもので三階建ての本館を始め、体育館やキャンプ場、プール、自転車百台や天体望遠鏡、こん虫採取道具などをそろえ、少年達はサイクリングや"生きた理科"の自然観察が出来、自然の中で生きた学習が出来る様になる。

湯川博士参拝さる

原子物理学　中間子論の権威、京都大学名誉教授湯川秀樹氏が先頃当社に参拝され、当社宝物を熱心に拝観された。氏は古代史にも造詣深い処を示され、考古学上の質問に当社職員もたじたじであった

文化祭盛大に行わる

西日本菊花大会だけなわの十一月十日、玄海町役場大講堂に於いて第四回玄海町文化祭が盛大に開催された。

大講堂には、午前十時から午后四時まで玄海町内の主婦たちから出品された手芸品、編物を始め、二百五十点が配列され、参観者を楽しませていた。

特に手芸品は年々進歩が著るしく専門家も驚きの様子であった。

又当日呼び物の大安売りが午后一時から三時まで行われ、店頭では買えない珍重な品々が飛ぶ様に売れていた。

秋晴れに恵まれ

七五三祭を齋行

天高く晴れ渡った秋空のもと、子供達の成長を祝う七五三祭が執り行われた。

当社では去年より七五三祭りは遷宮記念大祭諸行事の一端として期間も幅広く設け、玄海町、東海大学附属幼稚園々児等の団体参拝や地元マンモス団地からの参拝等で、例年にない賑いをみせた。

また、きれいに着飾った親子が太鼓の音と共に昇殿、お祓いを受け巫女さんからお守りと七五三大袋の千歳飴を手渡されて大喜び、美しく咲きほこった、見事な菊花をバックに記念撮影をするなど子供達には楽しい一日であった。

〔社務日誌抄〕

十一月　九日　宮地嶽教会境内清掃奉仕
十日　福岡ロータリークラブ三十名参拝
十一日　遷宮記念大祭宵祭菊花展表彰式
十二日　遷宮記念大祭、大分合同新聞社次長外二名来社
十五日　月次祭、七五三祭
十六日　対島ライオンズクラブ二十名参拝、造宮誌会議
十八日　神璽迎（大聖教信者二十名参列）
二十三日　新嘗祭
二十五日　須恵町成人会五十名参拝
二十六日　全国教職員互助会五十名参拝、福岡県観光連盟二十五名参拝

宗像史蹟（五）

宗像の古城（四）

二、次に名称、所在地、関係人物、年代、関係事項及び現状の一部について表示して参考にいたしたい。

名称	所在地	関係人物	年代	関係事項ならびに現状
蔦ケ嶽城址（城山）	宗像町赤間	宗像大宮司氏俊 仝　氏貞	応永年間 一四二〇年代 永禄三年（一五六〇年）	石垣、濠の跡あり 井戸あるも不明 遺瓦破片多く散在する
許斐嶽城址	宗像町南郷 王丸	宗像大宮司氏平 仝家人許斐左馬太夫 氏備 仝家人占部豊安 尚安	一一四〇年 永禄三年（一五六〇年）	遺物としては遺瓦あるも不明 馬馴の馬場及井戸あり
白山城址	宗像町河東 山田	宗像大宮司氏国 仝　正氏 仝　氏貞	文治五年（一一八九年） 一五二〇年 一五五五年	石垣の跡及当時の石類頂上に埋没する 城跡の裏、四〇メートルを下るところに岩穴があって清泉あり 当時の水の手である
片脇城址	玄海町田島 片脇	宗像大宮司清氏及代々の大宮司	延喜年間（九一五年以来）	頂上数十坪の平坦面に小祠あり 遺物不明
勝浦嶽城址	津屋崎町 勝浦	宗像大宮司氏国	一一九〇年	関係事項不明 全山樹木茂って遺跡不明
草崎城址（四塚）	玄海町神湊 草崎	宗像大宮司氏俊 仝家人占部甲斐	一一三〇年代 一五六〇年代	十六代の大宮司就任までこの居城に住む、後占部甲斐が入城する 遺物として小刀出土
勝島城址	玄海町神湊 勝島	宗像家人占部甲斐	一五六〇年代	草崎要害として占部甲斐が一時立籠る
吉田の城址	玄海町吉田	宗像大宮司氏仲	一一九〇年代	遺跡として見るべきものなし
緑ノ城址（名残）	宗像町徳重	宗像大宮司黒川刑部 仝　隆尚 仝　正氏	一五〇八年代	遺跡として見るべきものなし
宮地嶽城址	津屋崎町 宮司	宗像大宮司氏貞 仝家人小樋対馬	天文弘治年間（一五六〇年代）	宗像家の端城として家人小樋対馬守秀盛を定番として守らせる 頂上に城跡あり
手光の城址	福間町神興（手光）	宗像大宮司氏貞	一五七五年代	立花城へと押えとした番人定まらず
飯盛山城址	福間町内殿	宗像大宮司氏貞	一五六八年代	陣所にて許斐山城の砦、永禄十一年立花勢に攻められ激戦によって焼払われる 永禄十二年氏貞陣所とする 頂上に福智宮の小祠あり
高宮の城址	福間町畦町	宗像家人吉原源内 左エ門典通	弘治三年（二二一七年）	許斐山城の出城で弘治三年多賀美作守隆忠が大友氏へ降参して宗像家へ謀叛した 山腹に墓あり
蝮蛄羽古城址（けらはご）	福間町本木	宗像家人許斐兵部 少輔	天文弘治年間（一五六〇年代）	立花氏の家人大鶴宗松の守った舎利蔵の鶴ケ岳に対して名付けた 頂上数十坪の平坦面に太師の祠あり、当時の城址として附近に四時湧出の泉あり
鶫ケ岳城址（つくみ）	福間町 舎利蔵	薦野城主丹治修理亮峰時の弟次郎左エ門武道 立花の家人大鶴宗松	天文弘治年間（一五六〇年代）	関係事項は前と仝じ
城浦の城址	福間町本木	不明	不明	不明
大障子の城址	玄海町多礼	不明	不明	不明
石丸の城址（城腰） 赤城の城址 平等寺の城址（草場）	宗像町赤間 仝　河東 平等寺	宗像大宮司氏貞	不明	蔦ケ嶽城の番所である
大島の城址	大島村大島	宗像大宮司氏貞	一五七〇年代	大宮司家の備へ城で許斐氏鏡、占部八郎貞保、吉田貞勝に守らせる
滝之口城址	玄海町多礼	宗像大宮司氏貞	天文廿年（一五五〇年）	宗像家代々の居城と称し、遺跡不明、氏貞の母こゝに居住す

宗像大社歌会
俳句作品集（三）

東京　小浦　太平
天の紺ここに極まり林檎熟る

武丸野中　和子
刈田はただ広々と今朝の霜

津屋崎　菱花女
梅檀の宿に纏はる島紅葉

宗像　安部　光洋
秋晴るる阿蘇の噴煙横なぎに

土穴　八尋　恒夫
秋空に山登りして飯うまし

福岡　入江　柳江
土産物框に置きし旅の秋

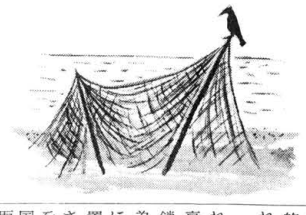
吉留　伊豆　湧泉
湯冷院に抜ける寒村竹の春

鞍手　来島　卯雨
秋光に偉容誇れる関門橋

東郷　有吉二春子
欠航の日もあるとかや寒のぼら

藤沢市　玄洋子
宮守る楠の神木幾百年

大井　吉田ますみ
知らぬ町過ぎ行く旅や秋思ます



宗像大社沖津宮祭祀遺跡
昭和四十五年度調査報告

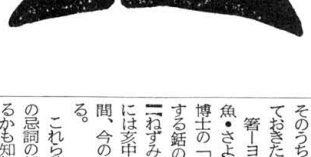
沖ノ島

沖の島がその海路の要衝に当っていたかは――地理的にも、又宗像神の別名を書紀においては「道主貴」と尊称した事例からも、充分察知される事である。又、室町時代前後に於けるいわゆる「倭寇」がこの地方を根拠地にした事実もある所から、朝鮮の古語がいつのまにか沖ノ島忌祠中に転用される様になったという事は、考え過ごしばかりではないかと思われる。即ち、「宗像神社史」の中にも幾つかの例が挙げてあるが、李朝世宗録巻46に、永享元年（約540年前）李朝の世宗の命を受けて、室町幕府に対する日本通信使として来航した朴端生が帰国しての報告文がある。

「前略……対馬より兵庫に至るまでの途中に於いて海賊の数及び往来の路をつぶさにした処によれば、対馬、一岐、内外大島（筑前）志賀島（筑前）平戸は赤馬関以西の海賊根拠地であり……中略……内外大島の海賊は宗像氏が支配し……下略」と記されている。内外大島については、他の考え方があるかも知れないが、筑前と（　）とあり、宗像氏がその海賊を支配していると通信使が見聞した事から内大島は現在宗像中津宮のある大島村であり、外大島は大島村の行政的属島である沖ノ島であると思われる。

江戸時代に入って国内が統一されてからは倭寇の勢力もすっかり衰え、次いでキリスト教禁止の為鎖国令が発せられ、取締りの為、早速黒田藩では大島・沖ノ島にも監視役として定番なる者を置くようになり、海外貿易も局限されて不便になったが、貿易の利を追って朝鮮中国を始め、西洋諸国の密貿易船が、秘かに来航し、取締りが厳重になれば成る程、いわゆる内外大島附近は絶好の取引地点に選ばれた事であろうと想像されるのである。

そうした事の一つの裏書きをするかの様に、寛永20年（約330年前）日本人を含む六国人が大島の津和瀬に漂着して来たが捕えられ、之は後に三代将軍家光が直々裁判をしたといわれる程の大事件になった。尤も之は調べによると、当時禁教のキリスト教布教のため東部藩を越えて来航した事と判明したが、前後の事情から私は水先案内をした者が、航路や地点を心得ての大島渡来であって、偶然に大島へ来たのではないと思う。それというのも、肥前方面の船乗りはその前後より筑前大島を「かじめの大島」と呼んでいる。今また大島は神占がちになったのだろうといわれていたが、私は



漢字を当てるならば梶目（梶をとる目標）の方が適当だと思う。

あるオランダ商館長の江戸旅行記に「長崎平戸呼子を経て梶目大島に投錨……」の一節があるのを見れば前六国人の大島漂着？は単なる漂着ではなく、水先案内者にはよく知られた密航路の一つであった様に思われるのである。又その後の黒田藩政時代において、韓国船や唐船が数回、大島域は対岸の地ノ島附近に漂流し、殊に後者の場合唐船の密貿易船が実に執ように接岸しようとして定番からの知らせで来島した藩士と激戦を交えた事件や、若松小倉沖では12・3艘の唐船と長州商船が沖置をするなどの事件もあり、そうした時の海路の目標として、大島や沖ノ島が指摘されたのであろう事は想像に難くないのである。

こうして朝鮮や西洋諸船が貴重品である米や酒などに対し、密航者が使用していたものを、内外大島で聞き覚えた人たちによって、隠語的に使用されていたものが、いつの間にか忌祠の中に混用される様になったものではなかろうか。そして、「シ・ス・チ」音とさけるのが普通である忌祠に、わざわざシ音やチ音などを使用している処に不可解な謎があると思われる。私はこれは即ち隠語の混用が招たものであると考える以外、現在の処これはという他見を知らないのである。

7、「いや」き忌詞の追記

前述したシャリ（米）チンタ（酒）又、アマケ（小便）ゴーヤ（大便）等の外ヨロズ（箸）イナカ（ねずみ）などの忌詞は、貝原益軒や社格目録など古くて最も信ずべきものの中にはなく、青柳種信の「筑紫紀行」に「今いうは皆海人が定めるとぞ聞くいやしきものの中に入るものだろうが、そのうち後の2語について追記しておきたい。

箸―ヨロズ――「辞海」には鉾魚・さけりの古名とあり、新村出博士の「広辞苑」には捕鯨に使用する銛の一種とある。

ねずみ・イナカ――「広辞苑」には家中・亥刻の上刻と下刻との間、今の午后11時頃と記してある。

これら辞書の説明は、この二つの忌詞の起源を解く鍵の一つであるかも知れない。

即ち、前者はその形容や用途などからの連想であり、後者はその出現の時刻からの発想であるかも知れないと愚考を重ねている。

8、沖ノ島金鶏談について

民族学辞典中に、全国各地に「金鶏談」なるものがある事を記されているが、実は沖ノ島にも同様の民談が伝えられている事は、世人のよく知るところである。これについては、「沖ノ島」上巻9頁に、最初の福岡城主黒田長政が、沖ノ島の御神宝類を、耶蘇をして取り寄せた処、城中に美変が相次いで起きた為に、沖の島神職を呼んで返納させたが、神職は何がしとかの谷に埋めて、その場所は子孫にも告げなかったという記事がある。

二宮佐天莚主人
四島一三三伝
――原田種夫著――

第九章　人さまざま

サンタポーラキャンプのボスになるまでに、あらゆる辛酸をなめつくし、どん底生活にも抗して起ち、千万人といえども利往かんという、人生の闘争の烈しい意慾と行動力が自然と形づくられていった。

サンタポーラキャンプでは、上下の信頼が厚く、生真面目で、きちんと仕事を処理していくかれのやり方が変われた。いわゆる、頼りになる男であった。弟の周造氏も、明治三十八年、十八才の年に渡米した。周造氏は、三才の時に、浮浪部の瀬の高山家へ養子にいった人であった。兄の一三が八年前に渡米して働いていることも刺戟となり、青雲の志を抱いて渡米する決心をしたのである。金鳥村の生家から百五十円もらって、神戸から四〇〇トンの濆州丸という汽船に乗ってメキシコに着いた。

メキシコで、米人経営の砂糖会社に働くことになって約二カ年ほどそこにいた。その内に、四島氏がサンタポーラキャンプに来ないかという誘いを受けたので、その会社を去って兄の処へ行くことになった。当時は入国制限でアメリカへは直接に行けないので、カナダ行きの切符をもとめ、ロスアンゼルスで途中下車をして、それからサンタポーラキャンプに行ったのであった。異国の土地で兄弟が相見えたことはどんなに懐かしくて嬉しかったことか、想像に余りがある。

周造氏は、ちょうど二年ほど、サンタポーラ農園で働き、後は、サクラメントに近い、デビスというところで苗木栽培業を営み、五十二才で帰国するまで三十二年間アメリカにいた。周造氏が渡米したところには、金鳥村から二人、片の瀬から五人が渡米して米人経営の農園で働いていたということだ。

明治三十九年（一九〇六年）四月、サンフランシスコに大震災が起った。市の大半は灰燼に帰し罹災者十万といわれ、市内にいた日本人七万余人の大部分が被災した。焼けあとに、日本人の家屋が建ちはじめ秩序が回復してくると、日本人に対する反感が強くなった。

日露戦争が終ったあとの明治四十年ごろから日本人排斥の風潮が高まって来た。根本の原因はやはり人種的な偏見であるが、働き者の日本人は、日曜も休まないし、仕事がよく出来るので白人の職域を侵すということであった。日本人の児童を排斥した事件とか、カリフォルニア州議会に現われた排日法案や、日本人排斥大会の開催、日本人と朝鮮人を排斥する「日韓排斥同盟会」の結成など、容易ならぬ反日の空気が強くなっていた。

未曽有の大震災の混乱の中で復興をせる日本人商店が排日派の目を刺戟したのだ。その年の十月、サンフランシスコ学務局は、四月十五日以降、すべての日清韓人小学生をクレー街にある東洋人小学校に転校させ、白人児童と同席させまいとした。その頃、サンフランシスコ市に六十九の小学校があって、日本人児童が通うのが二十二校、日本人学童は計九十三名だった。

転学させられた東洋人小学校は、被災地域の焦残を焼けあとにあった。周囲に人家がなく、白昼強盗がでたり、風紀もよくない。日本人側もだまっていない。在サンフランシスコ日本領事は、日本国民の名誉を毀損することを甚だしいと、文書で抗議し、日本国政府もアメリカ政府に日米間の条約に規定する居住権、身体財産の保護を享有する権利、営業と教育の権利の侵害であり、両国間の友好精神に背くものだと抗議した。日本人が襲撃されたり、日本人の食堂の追害事件なども起った。サンタポーラキャンプでも、白人の襲撃を強烈をふり放って追っ払ったり、キャンプに放火されるということがあった。

この日本人学童問題が解決し、日本人児童に対して小学校を開放するに、サンフランシスコ学務委員らが宣言して解決したのは、一九〇七年（明治四十年）二月であった。カリフォルニア州で日本人問題がやかましくなったのは、この州の労働者勢力が強く、かれらの歓心を買おうとする政治家のとりひきの具になった面もかなりあったというわれる。

そのアメリカが反日的になった頃だと思われるが、アメリカの大西洋艦隊を太平洋に巡航させ、ロスアンゼルスへ入港したことがあった。日本へ武威を見せて無言の恫喝をする考えだったかも知れない。これは市はじまって以来の大変な騒ぎで、その歓迎パーティの費用を一般から募集した。その四島氏はざっと五十ドルの小切手に手紙を添えてさしだした。

また、寄附の第一号であったら大変な評判となり、アメリカ人に歓迎され、地元の有力紙、エギザミナとロスアンゼルス・タイムス二紙の一面に写真入りで大きく報道されて、たいへん面はゆい思いをしたそうだ。

これは対日感情を好転させるのに大へん効果があったと、日本人会の人たちにひじょうに感謝された。会の方でも、五百弗も寄附もなっているかもわからない。この一九二年（明治四十五年）の在米邦人数は九、五七三人になっている。

四島商会というのは日用雑貨や、食料品を販売するかたわら労働力供給の仕事をする会社であって、なかなかの多角経営、のちにはサンタポーラから十二哩はなれた、砂糖大根の産地オックスナードに支店を出すまでに到り、四島氏の産をなす大きな源泉となった。

この頃のことだが、サンタポーラ農園の社長に美しい一人娘があって、氏との仲を農園で噂されるようになった。

（つづく）

職業に携わり、また何人くらいそこにいたかがわかるのでここに掲げてみよう。もちろん、この数は

四島商会の会員名簿

R.F.D.No.1 B.48 AULA

Sunset Ma 51.H.634

四島商会は、資本金二万五千弗で、一九〇九年（明治四十二年）十一月二十日の創立で大正七年七月に帰国するまで、四島氏はそこの社長であった。右の日米年鑑にオクスナード・サンタポーラ日本人営業別表というのが載っていて、当時、渡米した邦人がどんな書いてあった。あるいは、いまでも、四島氏のことが何と話題にのぼるかもわからない。こ

伊勢神宮に参拝して
――日本の心を想う――

去月、伊勢、奈良、京都と旅行し、還宮なったばかりの皇大神宮に参拝しました。二十年に一度の伊勢神宮の式年遷宮は、既に名辞閣に上し報導されましたが単に神社巡や、神社人にとってのみではなく、一億と越す日本人の真の国民的大祭儀でありました。

神路山、島路山のおごそかな林叢を形成し、その間に五十鈴川（一名御裳濯川）が流れ、宇治橋が一名御裳濯川）が流れ、宇治橋がかかっております。朝霧の立ちこめる参道の玉砂利を踏み進むと、自然に心が洗われ生れ変るような心情になる。数百年の樹令の杉木立の中に木の香ただよう新殿が層神秘的であり、もとめていた心のふるさとに辿りついた感激すらおぼえました。

心より国民参宮を希望してやみません。

さて国民生活に目を向けますと石油を始め紙類、洗剤、塩、砂糖の品不足、買いしめの主婦の行列に、戦時を思い起し慄然となっており、物資の節約愛護が最近頓に紙上に叫ばれる世となったが、中年以上の人は、戦時統制時代の耐乏生活に耐えた経験があり覚悟も出来るが、消費生活、つかいすてを美徳として育てられ生活して来た、若い世代の人々は全く至難

で、又恐らく想像もつかない事だろうと思う。如何なる事態にも対応出来るためには、日頃からその心がけが必要であり、長い歴史の間に昔の人たちから受けついできた生活の知恵についても再考してみるべきではなかろうか。

ある席で聞いた話しであるけれど、ある家庭で三人兄弟の子供たちが食事をしていた時、中の子供が「食事の時頂きます」と言うのは誰に向って言っているのだろう」と言い出した、それを聞いて小さい方の子供が、「それはお父ちゃんに言ってるのさ、お父さんが月給貰ってるじゃないか、変だなあ」と言っているうちに、上の子供が「ああ、やっぱり神様に言っているんだよ」と言って、話はそれて済んだが、はたで聞いているおばさんやお母さんも、「神様から頂」という考えがはっきりしていなかったので、内心ひやひやしたそうです。

古来、日本国民は、一日と十五日には、月の間の一つの起点であるから、この日は氏神様に参拝したものです。家庭においても神棚のお神除をし、神を取り替え、お祭りも重にしました。お供にもお酒、お菓子などをお供えして、おさがりを家族そろっていただくようにし、主人や老人はおさがりのお酒を楽しみ、女子供は菓子などのいただけるのを待つなど、この日は一家の誰にとっても嬉しく楽しい日であるようにしたものです。隣近所からの渡来品、自家でとれた初もの、野菜、果物すべて、まず神棚にお供えし、ほんの僅かでも家族そろって有難く、いただくようにして来ました。其他月々のお小遣いも学用品も、亦新しい衣服や、履物をおろすにも、この日を選ぶ、というようにすれば家族にとってこの日が待ち遠しい楽しいものに感じられ衣食住、すべて神様のおかげという観念が、言わず語らずに家族の頭に浸透するもので、家庭における子供のしつけというものも、このことから生まれるのであります。家庭を美しく社会を美しくする、もっとも大切な身近な事だと深く考えさせられます。

いよいよ本年も歳末を迎えるに至りました。神宮式年遷宮の年、真の日本人として遠い祖先ようけついできた勤勉にして互譲の精神にとんだ国民として生れ変りたいものです。